

1. 「家庭小説」としての『ドンビー父子』

チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の『ドンビー父子』(*Dombey and Son*, 1844-6)<sup>1</sup>のタイトルが表わす「ドンビー父子」とは、ドンビー氏が経営する「ドンビー父子商会」の名である。しかし、この小説は、その商会にまつわるビジネスの世界を扱っているのではない。と言うのも、「『ドンビー父子』はビジネスについてほとんど語っていない(*Dombey and Son says remarkably little about business*)」<sup>2</sup>からだ。この小説は、ドンビー氏の息子ポール(Paul)の誕生と妻ファニー(Fanny)の死で始まり、ドンビー氏の数々の高慢な振舞いが描かれるとともに、ポールの夭折、ドンビー氏の娘フローレンス(Florence)の孤独な生活、ドンビー氏のイーディス・グレインジャー(Edith Granger)との再婚、イーディスとドンビー氏の右腕ジェイムズ・カーカー (James Carker)の駆落ち、フローレンスの家出、ドンビー父子商会の破産、フローレンスとウォルター・ゲイ(Walter Gay)の結婚、ドンビー氏の改悛などが語られ、最後にドンビー氏とフローレンスの和解で幕を閉じる。つまり、この物語の根幹を成すのは、ドンビー氏の家庭の変遷である。そのため、『ドンビー父子』は本質的には、「社会小説(a social novel)」というよりも、むしろ「家庭小説(a domestic novel)」であるというのがディケンズ批評家の間での一致した見解と言える。例えば、その後の『ドンビー父子』批評に少なからぬ影響を及ぼしてきたと思われるスティーヴン・マーカス(Steven Marcus)は『ドンビー父子』を「家庭小説と見なされうるディケンズ最初の作品 (the first of Dickens's works that might be thought of as a domestic novel)」<sup>3</sup>と評している。また「社会小説と断言できるディケンズ最初の小説 (the first of Dickens' novels which can be said without qualification to be a social novel)」<sup>4</sup>と『ドンビー父子』を位置づけた F. S. シュウオーツバック(F. S. Schwarzbach)も、ディケンズの手法は「ある小さな代表的な部分を通して社会全体を描くこと(to depict the whole of society through some small, representative part of it)」<sup>5</sup>にあると述べている。無論、それはドンビー氏の家庭のことである。家庭という部分を通して描くことの効果に関しては、アンリ・タロン(Henri Talon)が非常に簡潔な説明を与えてくれている。

[T]his novel, in which is expressed Dickens's profound uneasiness at the sight of the society of his time, is yet primarily a domestic novel. To a large extent disorder in public life and disorder in private relationship stem from the same causes: selfishness, pride, and the desire to assert one's superiority...but, in the narrow framework of the family, better than in the social macrocosm, the evil is obvious:

unconcern for others may lead even to the disruption of natural bonds.<sup>6</sup>

この小説は、当時の社会を見て生じたディケンズの深い不安が表現されているとは言え、何よりも家庭小説である。大部分において、公的生活での無秩序と私的関係での無秩序は、同じ原因から生じる。つまり、利己主義、自尊心、それに己の優越を主張する欲望である・・・しかし、社会的総体におけるよりも家族という狭い枠組みの方が、その悪は分かりやすくなる。他人への無関心は自然な絆の分裂さえ引き起こすこともある。

ドンビー氏には社長という公的な面と父親という私的な面の二つの性格がある。そしてドンビー氏は、「ドンビー父子商会」が破産し、彼の家庭が崩壊することによって、公私両方の面で無秩序を引き起こす。その原因は彼の「利己主義、自尊心、それに己の優越を主張する欲望」であった。そして娘フローレンスへの態度に代表されるドンビー氏の「他人への無関心」が父娘にある「自然な絆」の分裂を引き起こしたのであった。

『ドンビー父子』はこのように家庭を扱った小説であり、ドンビー氏とポール、フローレンスの親子関係がその中核となっている。そしてこの三人の関係と、ドンビー家を取巻く人々、及び彼らに対するドンビー氏の態度などを考察することで、『ドンビー父子』で描かれる世界の本質が鮮明に浮かび上がってくるのである。

ドンビー氏にとって家族の中で大事な人間とは、すなわち「ドンビー父子商会」を一緒に経営していくパートナーとしての息子ポールだけであり、娘フローレンスは彼の心の中には存在しない。そしてポールの病死後、「彼と彼女は彼女が生まれて以来、決して父と子のようにではなかった(he and she had never been, from her birth, like father and child)」(649)というドンビー氏とフローレンスのいびつな親子関係が作品の軸となっていく。ドンビー氏はフローレンスを必要な存在として受け入れようとしない。しかし、フローレンスは「彼が縁を切ることの出来ない肉親(the flesh and blood he could not disown)」(142)と述べられているように、二人の関係は決して断ち切れるものではないということを『ドンビー父子』は主張していくのである。そしてこの断ち切れない関係は単に親子関係に留まらず、ドンビー氏と直接的、間接的にかかわる全ての人間にも当てはまることをも『ドンビー父子』は明らかにしていく。そしてここに「家庭小説」としての『ドンビー父子』の意義があると言える。

## 2. ドンビー氏とポールの親子関係

まずはドンビー氏とポールの親子関係について見ていきたいと思う。『ドンビー父子』の第一章は、ドンビー氏に息子ポールが生まれるとともに、妻ファニーが出産直後に命を落とすという内容である。これはこの小説の始まりとしていかにも相応しいと言える。待

望の息子が生まれたことにドンビー氏は「商会は、妻よ、名だけでなく実においても再びドンビー父子になるのだ (The House will once again, Mrs Dombey, be not only in name but in fact Dombey and Son)」(49)と有頂天になっている。ここでドンビー氏が言う‘the House’とは「商会」であって「家庭」ではない。ドンビー氏にとっては何よりもまず初めに「商会」ありきであって、「家庭」はそれほど大事に思っていないこと、つまり「ドンビー氏は一方を犠牲にしてもう一方を優先することを選んだ(Mr Dombey has chosen to give priority to one at the expense of the other)」<sup>7</sup>ことがこの場面で明らかにされる。

この時、ドンビー氏にはすでに六歳になる娘フローレンスがいた。しかし、「父子」という言葉が示唆するように、そしてドンビー氏自身「女の子供はドンビー父子商会には関係ないのだ(Girls have nothing to do with Dombey and Son)」(197)とあからさまに語るように、そこには娘が入り込む余地はない。そもそもドンビー氏にとって娘は何の価値もなく、むしろ邪魔な存在でしかなかった。と言うのも、「そのような子供は投資できない悪貨に過ぎなかった(such a child was merely a piece of base coin that couldn't be invested)」(51)と述べられているように、「ドンビー氏にとって、娘とは社会的結びつきを全く約束しないものである(The daughter holds for Dombey no promise of social alliance)」<sup>8</sup>からだ。ドンビー氏には、「ドンビー父子商会」を名実ともに体現する息子だけが必要だったのであり、ビジネスの観点からは何の使い道にもならない娘は要らなかったのである。ポールが生まれる場面は、物語の始まりであるとともに、ドンビー氏の野望実現の始まりを象徴するものでもあったのだ。そして妻ファニーが出産直後に死ぬという展開も、ドンビー氏の野望と無関係ではない。息子ポールが生まれたことによって、ファニーはドンビー氏の妻としての最低限の役割を果たしたことになり、言わば「ドンビー父子商会」にとっては必要なくなるのである。

ではドンビー氏にとってポールの存在は具体的にどのような意味を持っていたのだろうか。

**Mr Dombey's young child was, from the beginning, so distinctly important to him as a part of his own greatness, or (which is the same thing) of the greatness of Dombey and Son... (150-1)**

ドンビー氏の幼い子供は、彼自身の偉大さの一部として、あるいは(同じことであるが)ドンビー父子商会の偉大さの一部として初めから彼にとって明らかに重要なものであった・・・

ここから明らかのように、ドンビー氏にとって、ポールは商会の一部として重要であった

に過ぎない。つまり彼はポールを一人の人間として見ていないのである。フローレンスが「投資できない悪貨」に、また妻ファニーが食器類や家具に喩えられるように、ドンビー氏は人間を物と見なす傾向のある人物であった。そしてポールのことさえも「ドンビー父子商会」を補完する物としか考えていないのである。しかしこのような態度をとるドンビー氏は、後に手痛いしっぺ返しを食うことになる。病の床に臥していたポールは、部屋の片隅に立つドンビー氏を見てフローレンスに「あれは何？(What *is* that?)」(294)と尋ねるのである。言わばポールはドンビー氏と同じ価値観を身につけたことになるのだ。そしてその価値観をドンビー氏に対して用いたのであった。さらにポールから「あれ」と見られることで、すなわち人間として見られないことで、ドンビー氏はポールの愛情を得られなかったことも暗示されている。このような因果応報はディケンズの作品によく見られる特徴である。

ポールが幼くして亡くなることは、ドンビー氏にとって何とも皮肉なことであった。『ドンビー父子』の中で一番有名な場面と言え、ポールがドンビー氏に「パパ！お金って何？(Papa! what's money?)」(152)と尋ねる場面だろう。それに対してドンビー氏は、「お金はな、ポール、何でも出来るのだよ(Money, Paul, can do anything)」(152)と答えるが、ポールに「どうしてお金は僕にママを残してくれなかったの？(Why didn't money save me my mama?)」(153)と問い詰められると言葉に詰まってしまう。そしてポールの死によって、このドンビー氏の価値観が試され、「富や地位にもかかわらず、彼は息子の愛情を勝ち取ったり、息子の命を救うには無力であった(For all his money and position he is powerless to win his son's affection or save his son's life)」<sup>9</sup>ことが明らかとなる。お金は何でも出来るというドンビー氏の妄想は、ポール自身によって否定されたのである。

跡取り息子となるはずであったポールの死に関連して、さらに皮肉な出来事が起こる。ポールの死後、バルバドスへ向けて出航したドンビー父子商会の商船「跡取り息子号(the Son and Heir)」の難破である。「跡取り息子号」という名の船の難破は、跡取りとなるポールの死と重なる。ポールの死がドンビー氏に精神的打撃を与えたように、この船の遭難は、商会には痛手となったはずである。しかし、この船には保険が掛けられており、その損失は埋め合わせが出来ることをカーカーは仄めかしている。一方、ポールはお金で取り返せない。ここでもお金は何でも出来るというドンビー氏の価値観が否定されるのである。

ポールの死は「『ドンビー』の中のほぼ全ての親子関係の失敗(the failure of virtually all parent-child relationships in *Dombey*)」<sup>10</sup>を、すなわち虚栄心に満ちた親とその虚栄心を満たす道具として利用された子供が迎える運命を象徴している。

### 3. ドンビー氏とフローレンスの親子関係

ポールの死により、ドンビー氏のもとには必要なものがなくなり、不要なもの、つまり

フローレンスが残る。ではドンビー氏とフローレンスはどのような関係であったのか、とりわけドンビー氏のフローレンスに対する態度はどう描かれているかを見ていく。作品が三分の一も進まないうちにポールが亡くなり、それ以降はドンビー氏とフローレンスの関係に焦点が当てられるということは、「『ドンビー』の大きな主題は、明らかに父と娘の関係である(*Dombey's great subject is obviously the relationship between father and daughter*)」<sup>11</sup>と書いていい。先に述べたように、ドンビー氏にとってフローレンスは不要な存在であった。そして不要であるがゆえに、ドンビー氏はフローレンスと正面から向き合うことがない。そしてドンビー氏とフローレンスの間にある隔たりが、作品の中で度々強調される。今わの際の妻ファニーのベッドに寄り添うフローレンスをドンビー氏はただ眺めているだけであった。また、病に侵されたポールをフローレンスが看病するが、ここでもドンビー氏は二人の輪の中に入っていけず、二人を離れたところから見ているだけであった。先にドンビー氏はポールの愛情を得られなかったと述べたが、このポールの愛情を勝ち取ったのが、フローレンスである。ヘレナ・ミッチ(Helena Michie)が「この小説の少なくとも魅力的な最初の部分の感動の中心にあるのは、ポール・ドンビーと姉、フローレンスの関係である(*At the emotional center of the novel, at least of its compelling first section, is the relationship between Paul Dombey and his sister, Florence*)」<sup>12</sup>と指摘しているように、この二人は強固な絆で結ばれている。それゆえに、ドンビー氏との距離がより際立つのである。ドンビー氏は、「自分と息子の間に入ってくる者へのえも言われぬ不信、息子の尊敬、敬意を巡る対抗者や競争相手が現れることに対する傲慢な恐怖(*An indescribable distrust of anybody stepping in between himself and his son; a haughty dread of having any rival or partner in the boy's respect and deference*)」(103)を胸に抱いていたが、その不信感、恐怖感を抱かせる競争相手となったのが他ならぬフローレンスであった。そしてポールの死後、ドンビー氏にとってフローレンスの存在はこれまで以上に忌々しいものとなる。

**She had been unwelcome to him from the first; she was an aggravation of his bitterness now. (356)**

彼女は最初から彼にとって有難いものではなかった。彼女は今や彼の悲痛を悪化させるものであった。

フローレンスは父から愛されるにはどうしたらよいか自問し、人知れず努力する。そして作中でことさら強調されるのがフローレンスの孤独な生活であるが、このフローレンスの孤独は、ディケンズ自身のものでもあった。「この広い世界の孤児の一人として、生きている親の愛から締め出されたその子ほど、見捨てられていることはありません(not an

orphan in the wide world can be so deserted as the child who is an outcast from a living parent's love)」(423)とフローレンスについて語られる場面があるが、この親の愛から締め出された孤独こそ、ディケンズが経験した孤独である。少年時代、働きに出されたディケンズは、その後も母親が自分を働かせ続けようとしたことを終生忘れることがなかった。彼はこの苦しみを次のように語っている。

**I never afterwards forgot, I never shall forget, I never can forget, that my mother was warm for my being sent back.<sup>13</sup>**

私はその後決して忘れはしなかった、忘れることはしないし、忘れることも出来ない、母が私を送り返そうと熱心だったことを。

ディケンズが痛切に感じた母に捨てられたという思いは『ドンビー父子』では父に省みられない娘の孤独に置き換えられている。フローレンスとポールの経験は、「ディケンズが経験した心の奥の現実(the inner reality of Dickens's experience)」<sup>14</sup>を代弁しているとステューヴン・マーカスが述べているように、フローレンスの孤独感が読者の心に痛切に訴えかけ、真実味に溢れて描かれている背景には、ディケンズ自身の体験があったからではないかと考えられる。

イーディスとカーカーの駆落ちが発覚した朝、怒り心頭のドンビー氏はフローレンスの胸を殴りつけ、そのショックでフローレンスは家を飛び出す。この時フローレンスは「この世に父親は存在しないことを悟った(She saw she had no father upon earth)」(757)のである。一方、「ドンビー父子商会」の体面だけを気にかけるドンビー氏は「彼女を失ってしまった(he has lost her)」(808)とは思っていなかった。

商会が破産し、部下や召使など誰もが自分のもとを去り、最終的にフローレンスが孤独であったように、自らも孤独になった時、ドンビー氏は娘の価値に気がつき、自責の念に駆られる。

**Oh, how much better than this that he had loved her as he had his boy, and lost her as he had his boy, and laid them in their early grave together! (935)**

ああ、こうなるよりも、彼女を息子と同じように愛し、息子と同じように彼女も失い、二人を幼いうちに一緒に埋葬した方がどれほど良かったことか。

意識が朦朧とする中、ドンビー氏は鏡に映る自分の姿を人間ではなく「それ(it)」(938)、つまり物として認識する。そしてまさに自殺を図ろうとしていた時に、フローレンスが部

屋に飛び込んできた。その後フローレンスは心身ともに衰弱したドンビー氏の看病をする。つまり、「フローレンスは弟ポールの看護人となり、この小説の最後には、彼女は父の看護人にもなる(Florence becomes her brother Paul's nurse, and by the end of the novel she has also become her father's)」<sup>15</sup>のである。この行為を通して、かつてフローレンスとポールが持っていた絆が、フローレンスとドンビー氏の間にも生まれたのであった。

この時、フローレンスはすでにウォルターと結婚していた。子供の頃、迷子になったフローレンスはウォルターに助けられたことがあった。ドンビー氏はそのことでウォルターのことを以後ずっと忌々しいと思いつけ、彼を「跡取り息子号」に乗船させたのだった。そして遭難後、奇跡的に救出されたウォルターがフローレンスと結婚することにより、死んだポールに代わって、言わばウォルターがドンビー家の「跡取り息子」となるのである。これもまた、この小説が主張する断ち切れない関係の一例と言える。

#### 4. ドンビー氏とポリー・トゥードル家の関係

先にファニーはポールを生んだことで不要となったと述べた。しかしそれでも、ファニーの死はポールの乳母をどうするか、という問題を持ち出した。結局トックス嬢(Miss Tox)が連れてきたポリー・トゥードル(Polly Toodle)を乳母として雇うことになるが、ドンビー氏の心中は屈辱と不安が入り混じっていた。「ドンビー父子商会」は世界の中心と考えるドンビー氏にとって、「彼の心にある願望を達成させるための正に最初の一步目に、雇われの下女の頼りになること (being dependent for the very first step towards the accomplishment of his soul's desire, on a hired serving-woman)」(67)は屈辱的なことであった。またポリーには五人の子供がおり、そのことでドンビー氏は不安を感じたのである。彼の最大の不安は「彼らがいつかポールとのある種の間接関係を主張すること(their some day claiming a sort of relationship to Paul)」(67)であった。ドンビー氏はポリーの家族との関係を必要以上に大きくしないために、あくまで賃金の問題で片付けようとする。そして「そのような職務の遂行が不要となった時、そして給料の支払いが終わった時、我々の間の関係はそれで全ておしまいだ(When those duties cease to be required and rendered, and the stipend ceases to be paid, there is an end of all relations between us)」(68)と念を押す。さらにまるで自分を納得させるかのように「その子はお前を思い出しはしないだろう(The child will cease to remember you)」(68)と語る。

しかし、こういったドンビー氏の不安は次々と的中していく。ことあるごとに「ポールとのある種の間接関係」が主張されていくのである。しかし、最初にその関係を主張したのは、他ならぬポール自身であった。病の床に就いていたポールは、ポリーに会いたいと言い出したのだ。ポール自身はポリーのことを直接記憶していないにもかかわらず、自分の母と自分とをつないでくれる存在としてのポリーに会うことを望んだのである。

ポールの死後、バグストック大佐(Major Bagstock)と旅に出る時、ドンビー氏は機関車の火夫をしているポリーの夫トゥードルから駅で声を掛けられる。この時、トゥードルは喪章を着けていた。これを見てドンビー氏は、「誰もが自分の死んだ子の持ち分に対して何らかの主張をし、自分と競り合うとは！(everyone set up some claim or other to a share in his dead boy, and was a bidder against him!)」(353)と、さらには次のようにも嘆く。

To think that this lost child ...should have let in such a herd to insult him with their knowledge of his defeated hopes, and their boasts of claiming community of feeling with himself, so far removed: (353)

この亡くなった息子が・・・自分の希望が挫かれたことを知っていることで、さらにはこんなにもかけ離れているのに、自分との感情の共有を自慢げに主張することで、自分を侮辱しようとするこのような民衆を巻き込んでしまったなんて。

ここでポールはドンビー氏とトゥードルを結びつける媒体となっている。二人を結びつけたのはポールの死を悼む「感情の共有」であるが、その「感情の共有」をドンビー氏は否定したのであった。しかし「感情の共有」は、人々を結びつける重要な要素であることを『ドンビー父子』は主張していくのである。

さらにトゥードル家の長男ロブ(Rob)もドンビー氏との関係を主張する。彼は、職を求めて一時期ドンビー父子商会の前をうろついていたことがあった。乳母としての母の労働に対する見返りを求めたのだ。また、イーディスとカーカーの駆落ちに関する詳細な情報をドンビー氏に提供したのは、ロブである。このような人物の頼りになることは、ドンビー氏にとって屈辱的なことであった。しかし、皮肉なことに「貧しく汚らしい者だけが彼を助けることが出来る(it is the poor and dirty alone who can help him)」<sup>16</sup>のである。無論、ドンビー氏はその事実を認めたくないのだが、それでも「ドンビー氏が自分を引き離そうとすればするほど、関係の深さが争点として現われる(The more vigorously Mr. Dombey tries to separate himself, the more proximity arises as an issue)」<sup>17</sup>のだ。ここでもドンビー氏が断ち切ろうとした関係が、そのつながりの深さを主張したのである。

破産後、ドンビー氏は部屋に引きこもる生活を続ける。誰もがドンビー氏のもとを去った時、ドンビー宅の世話を引き受けにやって来たのは、ポリーであった。その時、ポリーの夫は「過去のご好意がなかったら(if it warn't for favours past)」(932)と語る。ドンビー氏がポリーと関係を断ち切ろうとしたのに対し、ポリーは正に「過去のご好意」のために、ドンビー氏に援助の手を差し伸べたのであった。先のフローレンスと同様、ポリーもポールとドンビー氏の二人の世話をすることになる。フローレンス、ポリーと、ドンビー氏自らが拒絶した人々が、ドンビー氏のもとに集まり、ドンビー氏は彼らの頼りになるのであ



る。

## 5. 上流階級と下層階級のつながり

『ドンビー父子』にはこの他にも、人々のつながり、特に上流階級と下層階級のつながりを意識させる場面がある。その代表的な例がブラウン夫人(Mrs Brown)とアリス・マーウッド(Alice Marwood)の母娘とスキュートン夫人(Mrs Skewton)とイーディスの母娘である。

**Were this miserable mother, and this miserable daughter, only the reduction to their lowest grade, of certain social vices sometimes prevailing higher up? In this round world of many circles within circles, do we make a weary journey from the high grade to the low, to find at last that they lie close together, that the two extremes touch, and that our journey's end is but our starting-place? (579)**

この惨めな母と惨めな娘は、もっと上流にもしばしばはびこっている社会悪が最下層にまで落ちてきたものに過ぎなかったのか？ 巡り巡るこの丸い世界の中で、我々は上流階級から下層階級へと退屈な旅をすると、両者はぴったりと一緒に横たわり、両極が触れ合い、旅の終着点は出発点にすぎないことを最後に知るだけということなのか？

この場面は、ブラウン夫人とアリスの「惨めな母と惨めな娘」をスキュートン夫人とイーディスと対比させている。そしてこの四人が顔を合わせる場面では、「イーディスは若い方の女を自分と比較せずにはいられなかった(Edith could not but compare the younger woman with herself)」(662)と述べられているように、イーディスとアリスはお互いを意識する。実は二人は従姉妹同士であったことが後に判明する。その意味でアリスは「イーディスの実際の従姉妹で、下層階級のクローン(Edith's first cousin and lower-class clone)」<sup>18</sup>である。しかし二人の関係は単に血縁関係にあっただけではない。二人とも強欲な母親に利用された犠牲者であった。この点で二人の境遇は一致する。さらにもう一つ二人には共通点があった。アリスはカーカーに誘惑され、捨てられた過去があり、一方イーディスはドンビー氏への復讐としてカーカーと駆落ちし、その後、カーカーを見捨てることになる。つまり、二人ともカーカーを介してつながりを持つのである。このようにアリスとイーディスは「この小説のまったく異なる社会集団を結びつけること(linking together the disparate social spheres of the novel)」<sup>19</sup>という役割を果たしている。そしてこの上流階級に属するイーディスと墮落した売春婦アリスという二人の対比を通して、上流階級と下層階級の人間が結びつく「巡り巡るこの丸い世界」の存在が示されるのだ。

イーディスはドンビー氏と結婚によって結び付けられる。一方、社会から見捨てられた存在とでも言うべきブラウン夫人とアリスも、ドンビー氏とのつながりの存在を主張する。ブラウン夫人はこう言う。

**'There's relationship without your clergy and your wedding rings they may make it, but they can't break it and my daughter's well related.'** (921)

「牧師やら結婚指輪なんてなくても関係はあるのだよ そいつらは関係を作り出すことはあっても、壊すことは出来ねえよ 私の娘だって、お偉い方と関係あるのだよ」

ブラウン夫人はドンビー氏とイーディスの結婚により、自分たちがドンビー氏と姻戚関係になったことを言いたいのだが、彼らの結びつきはそれだけではない。彼らにはドンビー氏と共通するものがあった。ブラウン夫人の強欲、とりわけ金銭欲は、ドンビー氏に通じるものである。言わば二人の間には、金こそ全てという「感情の共有」があったと言える。ゆえに二人はイーディスとカーカーについての情報を金銭で取引するのである。一方、アリスもドンビー氏との「感情の共有」を主張する。

**'A woman's anger is pretty much the same here, as in your fine house. I am angry. I have been so, many years. I have as good cause for my anger as you have for yours, and its objects is the same man.'** (819)

「女の怒りってのは、ここだろうがあんたの立派な屋敷だろうが同じものさ。あたいは怒ってるよ。もう何年も怒ってるよ。あたいの怒りにはあんたと同じようにもったもな訳があって、その矛先も同じ男に向いてるんだよ」

ドンビー氏とアリスは二人ともカーカーに裏切られた人間であった。ドンビー氏とアリスはカーカーに対する怒りという「感情の共有」で結ばれるのである。「あたいらはかけ離れているように思えるけど、そうなんだよ(Wide as the distance may seem between us, it is so)」(820)とアリスが言うように、「感情の共有」は階級差を超えていくものなのだ。このように階級のかけ離れた人物たちの結びつきも作品の中で次々と示されていくのである。

## 6. 結び

以上見てきたように、『ドンビー父子』は決して切り離すことの出来ない関係で結ばれた人々のつながりを主張している。ここで描かれる世界は「巡り巡る丸い世界」であり、そ

ここでは様々な人々が出会い、結びつきを持って一つの世界を作っている。『ドンビー父子』は、その世界をドンビー氏の家庭という部分を通して効果的に表現した「家庭小説」である。ドンビー氏のように、結びつきの関係を断ち切ろうとすると、その世界の秩序に狂いが生じる様を『ドンビー父子』は描いている。そしてその結びつきは家庭内だけでなく、階級の違いを超えて全ての人間に共通するものであることをも『ドンビー父子』は主張している。階級差を超える人々のつながりの世界、家庭を中心に一つの集合体として世界全体を捉えるディケンズのこのような提喩的手法は、後の『荒涼館』(*Bleak House*, 1852-3)において顕著に現われる特徴となる。

---

註

<sup>1</sup> テクストとして Charles Dickens, *Dombey and Son*, ed. Peter Fairclough (London: Penguin, 1985)を用いた。本書からの引用は全て本文中にページ数を記す。尚、日本語訳は拙訳。

<sup>2</sup> Robert Newsom, “Embodying *Dombey*: Whole and in Part.” *Dickens Studies Annual* 18, ed. Michael Timko, et al. (New York: AMS Press, 1989), 207.

<sup>3</sup> Steven Marcus, *Dickens: from Pickwick to Dombey* (London: Chatto & Windus, 1965), 297.

<sup>4</sup> F. S. Schwarzbach, *Dickens and the City* (London: The Athlone Press, 1979), 101.

<sup>5</sup> Schwarzbach, 102.

<sup>6</sup> Henri Talon, “*Dombey and Son*: A Closer Look at the Text.” *Dickens Studies Annual* 1, ed. Robert B. Partlow, Jr. (Carbondale: Southern Illinois UP, 1970), 147-8.

<sup>7</sup> Malcolm Andrews, *Dickens and the Grown-Up Child* (Houndmills: Macmillan, 1994), 121.

<sup>8</sup> Hilary M. Schor, *Dickens and the Daughter of the House* (Cambridge: Cambridge UP, 1999), 52.

<sup>9</sup> Natalie McKnight, *Idiot, Madmen and Other Prisoners in Dickens* (New York: St. Martin's Press, 1993), 103.

<sup>10</sup> John M. Picker, *Victorian Soundscapes* (New York: Oxford UP, 2003), 22.

<sup>11</sup> Audrey Jaffe, *Vanishing Points: Dickens, Narrative, and the Subject of Omniscience* (Berkeley: U of California P, 1991), 73.

<sup>12</sup> Helena Michie, “From Blood to Law: The Embarrassments of Family in Dickens.” *Palgrave Advances in Charles Dickens Studies*, ed. John Bowen and Robert L. Patten (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2006), 141.

<sup>13</sup> John Forster, *The Life of Charles Dickens*, 2vols (London: The Waverley Book Company, 1911), vol.1, 35.

<sup>14</sup> Marcus, 354.

<sup>15</sup> Laura C. Berry, “In the Bosom of the Family: The Wet-Nurse, the Railroad, and *Dombey and Son*.” *Dickens Studies Annual* 25, ed. Michael Timko and Edward Guiliano (New York: AMS Press, 1996), 21.

<sup>16</sup> Berry, 11.

<sup>17</sup> Berry, 12.

<sup>18</sup> Patrick J. McCarthy, “*Dombey and Son*: Language and the Roots of Meaning.” *Dickens Studies Annual* 19, ed. Michael Timko, et al. (New York: AMS Press, 1990), 101.

<sup>19</sup> Lyn Pykett, *Charles Dickens* (Basingstoke: Palgrave, 2002), 106.

『ふいおーちゅん』第17号 (新生言語文化研究会、2006年3月)